

ゲオルク・ジンメル『ゲーテ』(1) —「自己決定」の神話を超えて—

荻野 雄

Georg Simmel's *Goethe* (1):
Beyond the myth of "self-determination"

Takeshi OGINO

Accepted October 7, 2020

抄録：本稿は、ドイツの思想家ゲオルク・ジンメルの「生の哲学」を解明する最初の試みとして、『ゲーテ』を考察する。ジンメルは晩年に、自身の思想の集大成として「生の哲学」を展開したが、その難解さのためにそれはこれまで思想史研究ではほとんど顧みられてこなかった。本稿は山崎正和の「リズムの哲学」を解説の手引きにして、ジンメルの生の哲学の最初の作品である『ゲーテ』を読み直していく。ジンメルも山崎と同様に近代的な「生産の論理」、またその基礎である「自己決定する自我」の克服を意図しており、ゲーテのうちに人間の「本来的な在り方」を認めたのだった。

索引語：ゲオルク・ジンメル、『ゲーテ』、山崎正和、自己決定する自我、生の哲学

Abstract: This article seeks to elucidate the "Lebensphilosophie" in German thinker Georg Simmel's *Goethe*. Simmel developed his own "Lebensphilosophie" in his later years as the final conclusion of his thought. But his Lebensphilosophie has been rarely considered up to now because of its high difficulty. This article rereads *Goethe*, the first work of Simmel's philosophy of life, using Yamazaki Masakazu's "philosophy of rhythm" as the guide for deciphering. Like Yamazaki, Simmel tried to overcome the modern "logic of production" and the "self-determining self" as its basis and found in *Goethe* "the authentic existence" of human beings.

Key Words: Georg Simmel, *Goethe*, Yamazaki Masakazu, self-determining self, Lebensphilosophie

1. ジンメルの生の哲学の現在性

20 世紀の思想は、深刻な社会的・政治的混乱を背景に、その原因と目された「近代」という時代の克服をその最も重要な課題の一つとしていた。その際一部の論者は、近代の根幹を禁欲的な「生産の論理」のうちに見定め、この論理の陥穽を指摘して代替的な基礎原理を模索した。彼らの主張は、21 世紀の今日決して古びてしまっていない。現在生産の論理は、グローバリゼーションの不可逆的進行に伴って、むしろいっそう鞏固になっているのである。

日本でこうした視角から時代と格闘し続けてきた代表的な論者は、評論家の山崎正和であろう¹⁾。山崎は近代の核を、目的志向的な自我モデルのうちに見てとっている。山崎によれば、人間とは本来「リズム」に乗せられている存在、意志決定以前にそれに担われている存在であるのだが、近代が「自由意志をもつ自我」、「自己決定する自我」という「虚構」を思考の基礎に据えたため、人間存在の根源である自然のリズムは抑圧されて、「自己決定する自我」を単位とする合理的な社会体系が組み立てられたのだった。現実にはこの「自我」は、個人を効率的な生産へと動員するための拠点となっており、近代社会システムの中では個人は自身の外部の目的や価値へと従属し、その実現のために禁欲的に献身することを強いられている、あるいは自ずからそれを意志するよう誘われている。実に半世紀にも渡って近代的自我モデルからの脱却を訴えてきた山崎は、21 世紀以降世界の趨勢への対決姿勢をいっそう強め、2018 年の『リズムの哲学ノート』では、近代に根底的な懐疑を向けるに到っている。

危機感を深める山崎とは対照的に、今日の主要な社会思想の立場は、こうした生産の論理をもはや批判の対象とはしていない。社会主義の退潮後に社会思想の絶対的主流へと復帰した自由主義は、正にこの論理に依拠してグローバリゼーションを積極的に推進しており、自由主義の批判的修正を目論む左派のリベラリズムも、生産の論理の圏内にある。リベラリズムは個人の自己決定権を至上価値に据える思想的立場であり、確かに個人に対する外部からの規制や指導の最小限化を主張するが、山崎も指摘するように、個人がいったん何らかの理想や価値を自らの決断で選び取れば、それらへの自発的で一貫した忠誠を求めていく。それゆえに結局リベラリズムの論理においても、個人は外部の目的に隷属してしまうことになるのである。現在社会思想は、常識的自我観とそれに依拠する近代的権利概念を問い質すことはほとんどなく、それらに無批判に依拠するようになっている。山崎は、今日の社会思想家が「哲学への関心が極端に薄」いことに、深い疑念を投げかける。「今日、人権という観念がまったく便宜的に使われ、何の哲学的な根拠も持たないという現実に憂慮もせず、安閑と論を張る社会学者は多い。」²⁾ それに対して山崎は、外部の価値へと意識的に「決断する」自我モデルにまで掘り下げて近代を批判し、内奥の根源から動かされてある自我モデルをそれにとって替えようとしている。今日真に有効な批判的思考を起動させる力は、こうした山崎の「反時代的な」思考枠組みにこそ秘められているだろう。

このように「リズムの哲学」から目的志向的自我を批判する山崎の立場は、しかし思想史上決して孤立した見解であるわけではない。20 世紀の思想史からは、それと強く共鳴し合っている思想を見出すことができるのである。山崎の思想はいわゆる「生の哲学」の系譜に位置づけられるが、ドイツにおける代表的な生の哲学者であるゲオルク・ジンメルは、山崎のそれと非常に近い哲学を先駆的に展開していた。すなわち、『ゲーテ』(1913)、『レンブラント』(1915)、『生の観方』(1918)といった晩年の一連の哲学的著作を通じて、ジンメルもまた、一見自律的な近代的な自我が実際には外部の価

値や目的に従属していることを露わにしながら、内奥から動かされている自我に、生産の論理およびその基礎である目的論的な自我の在り方から逃れていく可能性を探っていたのだった。

ジンメルの思想は1990年代より再び脚光を浴びており、その社会学、文化論、都市論を考察する数多くの研究が発表され、一時はジンメル・ルネサンスとも評される状況が出来たほどであった。にもかかわらずジンメル晩年の生の哲学だけは、これまで世界的にもほとんど研究の対象とはなっていない。それを扱った海外の研究としては、わずかに、アメリカにジンメルの哲学を紹介した最初（おそらく最後）の作品であるヴァインガルトナーの『経験と文化』、レジェによるジンメル思想の網羅的考察『ゲオルク・ジンメルの思想』を挙げることができるだけである³⁾。そしていずれも、「生」と「文化」の葛藤というジンメル文化論のよく知られた図式にその哲学も還元しているため、ジンメルの生概念の含意と批判的射程は十分掘り下げられてはいない。国内では北川東子の『ジンメル』と、西谷敬の「ジンメルの「個性的法則」」が哲学研究者によるジンメル論であるが、北川はジンメルの生の哲学の詳細な検討は避けており、西谷も『生の観方』第四章だけからジンメルの「倫理学」の抽出を試みて、やはりジンメルの生の哲学の文脈は顧みていない⁴⁾。ハイデガーに高く評価された⁵⁾彼の哲学がこのように思想史研究で忌避されているのは、何よりも、極度の抽象性と形式性に由来するその捉えがたさのせいであろう。

十分に理解されないままにジンメルの生の哲学は、さらに、人間が依拠できる根源的なものへの信頼をなお抱きえた、過去の世界に属するものとして素通りされている。確かに、二度の世界大戦はこうした根源への信頼を粉碎してしまったのであり、第一次世界大戦直後のドイツ、第二次世界大戦直後のフランスや日本といった既存の秩序が崩壊した社会で人々の心を捉えたのは、人間はいかなる寄る辺ももたない中で、絶えず孤独な決断を強いられていく存在だと説く実存主義であった。実存主義はそのうえで、人間が投げ込まれたこの絶望的状况は、個人には禁忌はなくあらゆる可能性に開かれているという希望でもあると人々を鼓舞した。こうしてジンメルの哲学に関しては、せいぜいで、現在の哲学に刺激は与えた「過度期の哲学」であるという評価が下されることになった。「ジンメルは、ロダンとバルラハ、セガンティーニとカンディンスキー、ラスクとルカーチ、カッシーラーとハイデガーとを隔てる溝の向こう側にいる」⁶⁾と、ハーバーマスも書いている。

しかしジンメルの生の哲学を、山崎の思考枠組みと重ね合わせて、根源から動かされてあることへと立ち還っていく思想として読み直していくとき、ジンメルが提示しようとしていた哲学的ヴィジョンが一定程度はっきりした輪郭で立ち現れてくる。山崎の思想は、これまで理解困難な文書として扱われてきたジンメル後期の哲学への通路を拓いてくれるのである。このとき同時にまた、ジンメルの哲学の根本的な問題意識も炙り出されてくる。ジンメルは、個人が内奥から動かされてある在り方を、生産の論理の基礎となっている、外部の価値や目的を志向する在り方と対立関係に置いているのである。このようにして、生産の論理の批判という今日焦眉の問題から考えるならば、ジンメルの思想と続く世代の思想の現在性に関する評価もまた逆転されるだろう。実存主義も、単なる刹那的な生の称賛に終わらないためには、個人に何らかの価値や運動へのアンガジェマン、つまりは長期的で一貫的なコミットメントを求めていかざるをえないから、最終的には生産の論理に回収されていく。その意味で、実存主義の方が、近代の破局を帰結させた思想の延長線上にあるとも言えるのである。

このように、山崎の視角から読み直すことで、これまで未踏の地のまま放置されていたジンメルの生の哲学の今日的意義が掘り出されてくるだろう。ジンメルの母国ドイツでも、Metzler出版社から(同社のドイツ文学者ハンドブックシリーズの一冊として)刊行予定のゲオルク・ジンメルのハンドブッ

クが特に哲学に焦点を当てる予定であるなど、彼の哲学に現在再び注目が集まっている⁷⁾。何よりも、ジンメル晩年の生の哲学は、ジンメル自身自分の思想の集大成と位置づけていた以上、その考察を回避してはジンメル研究は重大な欠損を抱えることになる。そこで本稿では、ジンメルの哲学に迫る困難な試みの第一歩として、彼が生哲学に踏み出した最初の一步である『ゲーテ』を取り上げ、解説していくこととする。まずは、ジンメルの哲学の根本的な問題設定も、山崎と同様に外部から生きる人間と内部から生きる人間との対置であることを、『ゲーテ』から確認しておきたい。

2. 『ゲーテ』の基本的狙いとその批判的意図

ジンメルの『ゲーテ』は、当時ドイツに広くみられたゲーテ崇拜に加わる作品ではない。「私は、ゲーテに対するいかなる偶像崇拜からも自由だと思っている。」(264)⁸⁾ それどころかジンメルは、驚くべきことに、ゲーテは「普通の人間」だったと断言している。ただし、ゲーテは人間の可能性を最大限に実現したのであり、ゲーテの存在は普通の人間のいわば極限的事例なのであった。「ゲーテによって、端的に正常なものが完璧に偉大なるものの次元を満たしうることが、全く普遍的なものが、普遍的なものであることをやめることなく最高の個性という現象となりうるものが、証明された。……ゲーテ—無限の漸近線の最高の事例—は、……そのリズムにおいて、……普遍的で絶対的な人間的なものを、……単に価値として要求しただけではなく、価値として生きたのである。ゲーテこそは、単なる人間的なものの人間的なもの自身による偉大な正当化である。……「純粋に人間的なものの勝利」……これこそ、彼の実存の全体的意味であった。」(269-270) ジンメルの『ゲーテ』の狙いは、ゲーテの生涯の記述でもゲーテの芸術作品の解釈でもなく、人間のいわば「本来的な」可能性としての「ゲーテという理念」を、ゲーテの業績、発言、実践、および彼がそれを生きたと思われる確信に依拠して描出することであった。ジンメルはこの理念をまた、「ゲーテの詩作と研究を導き、行為と世界観を形成した精神性の究極的性質と運動根拠 (Bewegungsgründe)」(9)、「ゲーテ的実存 (Existenz) の精神的意味」(9)、「ゲーテの存在の純粋なリズム (Rhythmik)」(9) とも言い換えている。

そしてジンメルは、ゲーテ的存在様式を人間の「非本来的な」在り方と対比していく。この非本来的な在り方とは、自身の「外部」に重心を置いて、そうした外部の価値や目的のために世界を見積もり操作し篡奪していく在り方、つまり近代的な生産の論理に従属する存在様式であった。『ゲーテ』全編は、この近代的な存在様式に対する批判に貫かれているのである。

先取りして言えばジンメルは、ゲーテ的な本来的存在様式を、個人的生の内奥から生き、そして世界と不可分に結びついている在り方と規定する。本来、自我は世界に依存し、そして世界も自我に依存しているのである。この在り方を、ジンメルは一つには、個人を外部から規定された存在と捉える立場と対比する。それには、世界は或る理想へ向かう必然的過程であり、個人はこの過程に組み込まれていると考える目的論、個人は社会からの影響から成り立っていると見なす社会学主義、個人は完全に因果的に規定された存在だと説く自然主義が含まれる。「これら全ての事例において人間は「内面から生きる」ことはできない。なぜならこれらの場合、人間の「内的なもの」はそれ自身としてはいかなる生産力も展開しないからである。」(153) ジンメルによれば、ゲーテはこうした個人把握と鋭く対立していた。「個人は世界の出来事の究極的源泉であり、個人としての存在上創造的であるか、それとも超個人的な由来のものの力と流れの通過点に過ぎないのか、……これは生の観方の枢軸的問

いであり、この問いに関してゲーテが前者を支持する姿勢は断固としていた。それはゲーテの形而上学的根本感情だった。」(154)

しかし、『ゲート』全編を通じて問題となるのは、個人の創発性を認めながらも、個人を世界から切り離された孤立した主観と見なす立場、つまり近代的な主観理解との対比である。ジンメルによれば近代的に捉えられた主観は、世界との根源的な繋がりを断ち切って、自身の内に閉じこもって客観と対立するようになっている。「後年ゲーテが主観的であることを時代の病と見なしたとすれば、そこで考えられていた主観性とは、かの「世界との」統一から切り離されたためもはや実り豊かではない主観性、真理を産出し真理によって産出されるという仕方では真理と結びつけられているのではない主観性であった。それゆえにゲーテにとっては、自身のうちに集中した主観性は、同様に原理的に誤謬の場であった。」(41) 初期の『道徳科学序説』第2巻(1893)でジンメルは、孤立した自我の決断は、「自我」の決断ではありえないことを指摘している。なぜなら、決断を下す自我自身が因果的に決定されているのではないかという自然主義的疑念を払拭するためには、自我の内にさらに決断する自我を想定し、さらにその自我の因果的被決定性を否定するためにさらなる自我を想定するという無限遡行に陥るか、決断を単なる偶然、行き当たりばったりのものとするかの、いずれかしかないからである⁹⁾。それゆえに世界から自律した近代的な主観は、逆説的にも外部の価値に依拠し、外部から生きる存在となる。ヴェーバーが想定するように、近代的人間はヨーロッパで、「合理化された」人間、事象に即する人間として誕生したとすれば、合理主義、即事象主義こそ外部を志向する在り方の典型である。「合理主義とは、内容から生を展開すること、内容から初めて生に力と権利を供給することである—なぜなら合理主義は生を信じていないからである。」(14)「事象人間は合目的性を名誉と感じ、そのため彼の生の過程は根からの成長ではなく、目的からの牽引である。」(15) かくして最終章「発展」の冒頭で、ジンメルはこう述べることになる。「その実存の形式の違いに表現される価値の区別のうち、私には次の区別が最上位にくると思われる。すなわち、あのことまたはこのことを果たすべき人間、個々の要求の総和を自身の行為と存在によって果たすことを定められた、またはそのことを意志する人間であるか。それとも、全体として、その実存の総体性でもって何かをなすべき、あるいは何かであるべき人間であるか。」(218)

そして近代的主観は、外部の価値を拠り所として、そこから、あるいはそこへと向けて世界を理解する。つまり自身が選んだ価値ないし目的の実現への有用性、効率性から、世界は理解されるのであり、言い換えれば世界という真の現実から切り離された主観は、自身の周りに疑似現実を、世界と自我とを隔てかつ媒介する「表象」の体制を、構築するのである。こうした近代人の在り方は、プラグマティズムの真理観に反映されているとジンメルは言う。プラグマティズムの真理観は目的論的真理観であり、それによれば、世界を我々にとって有益な目的に動員するために、人間と事物の間に介在させられた「表象」こそが真理なのである。「常に決定的であるのは、表象像の内容の、一方では我々の目的の内容との、他方では現実の内容との関係である。なぜなら表象像はこれら両者を媒介せねばならないから、つまり現実を目的のために利用せねばならないからである。ここで問題なのは、人間が表象を自身の生の内的要素として有することではない。世界の個別的な事物に向かう行為が、そうした個別的なものを我々に対して望ましい仕方では反作用させるように、表象が適切な手段、目的奉仕的前提となっていることが問題なのである。」(34) このようにプラグマティズムにとっての真理、「内容としての表象の真理性」は、世界の操作を可能にし、円滑にするかどうかを基準としている。「プラグマティズムは世界を、世界の認識によって利用し尽すことを目的としているから、その真理の基

準を、人間が事物から経験し、そして表象によってただ媒介されるに過ぎない現実の作用に結びつける。こうした事物と生との間の功利主義的關係を、表象は一つの、しかも後に再び捨て去られる要素として媒介するのである。」(34-35)

表象の体制は事物に対して単に功利主義的な關係を作るに過ぎないのに、近代人は実践の必要上それを「現実そのもの」として生きている。「普通の人間は、実践的行為の助けとなる諸範疇によって世界を体験している一すなわち、客観的な出来事を主観的な出来事へと転換している。こうした諸範疇はいわば手仕事道具であり、それによって普通の人間は存在の総体性から、彼にとって世界であるものを切り出し、繋ぎ合わせるのである。かの全体存在の究極的な統一定式は、普通の人間の場合実践的に色づけられている。そして、単にこうしたタイプの人間が圧倒的に大多数であるからばかりではなく、別の方向性を備えた人間もその関心と必然性の大部分では実践的実存遂行という同じ地盤に立っているから、我々はこのように形成された体験される世界像を端的な現実性と名づけてしまう。実際にはそれは単に一つの現実性であり、平均的で実践的な関心づけから放射される諸範疇によって形成された体験に過ぎない。」(28-29) 後にも述べるとおり、近代人は虚構を生きているとすらジンメルは述べている。「我々の感官はかなり粗野で鈍重であるため、とりわけ事物への実践的な關係のため、確固たる切断面や固定された状態という虚構 (Fiktion) にしがみついてしまう。」(91)

『ゲーテ』は、こうした虚構を生きる近代人に「ゲーテの理念」を対峙させるのだが、しかしジンメルによればゲーテ自身がこの「理念」をまとめて述べたことはなく、その細かい断片がゲーテの作品全体に渡って、あるいはふと漏らされた言葉の中に散見できるだけである。それゆえジンメルは、この「理念」に対する自らの直観を論述の基礎としている。『ゲーテ』は、様々に観点を替えて、そのつど一から出発してこの同じ直観を立体的に浮き上がらせる試みであるとも言える。「それゆえに私は、どの章においても他の章と全く同じことが書かれていると思われても、この本に対する批判には全然ならないと考えている。」(10) このように『ゲーテ』で記述されるのは、ジンメルのプリズムを通じて結ばれたゲーテのイメージであり、かつ他の人間には他のゲーテ像がありえ、それらはそれぞれに正しいともジンメルは述べているから、『ゲーテ』においては彼自身の思想が、ゲーテのそれに濃密に仮託されて語り出されていると考えてよいであろう。『ゲーテ』はジンメル自身の「生の観方」の開陳でもあり、そのことをジンメル自身序章で示唆している。「彼の創造したもの全てを偉大な自己告白と見なすゲーテ解釈は、認められようと認められまいと、常にまた解釈する者の自己告白となるだろう。」(10) 『ゲーテ』がジンメルの自己の思想の開示としての性格を色濃くもつことは、『大衆の反逆』で有名なスペインの哲学者のオルテガも指摘していることである。オルテガは1932年にこう書いている。「我々はドイツに、優れたゲーテ論の貸しがある。読むに値するゲーテ論は今日までジンメルの『ゲーテ』だけであるが、この本もジンメルの他の本全てと同様に不十分である。なぜならこの鋭敏な精神—言うなれば哲学的リヌーは、決して自分が選んだ対象それ自身を問うていくのではなく、それを演台にして、その上で自身の分析の驚嘆すべき妙技を披歴しているからである。」¹⁰⁾ それゆえここでは、ジンメルが叙述するゲーテの「世界観」を、同時にジンメルの「生の観方」でもあるものとして扱うことにする。言い換えればジンメルは、ゲーテ的存在を、自身の考える「本来的な」人間の在り方を理想的に実現したものとして解釈していると理解する。

以下でこの「自身の内奥から生きる」在り方に関するジンメルの叙述を、できるだけ整理して辿っていくことにするが、二つの点をあらかじめご了承ください。第一に、ジンメルが提示しようとしたのはゲーテという理念の「直観」、つまり一つのまとまったイメージであるため、随所で後に説

明する事象を先取りした文章を引用したり、以前述べたことを繰り返したりすることは避けがたい。第二に、ジンメルの『ゲーテ』は叙述の抽象性や錯綜のためやはり極めて難解な著作である。そのためジンメル研究でもほとんど扱われたことがなく、管見に入る限りでは、レジエの前掲書で最初の数章の論点の幾つかが羅列的に紹介されているに留まる¹¹⁾。本稿では『ゲーテ』を、外部の目的や価値を志向する近代的な人間様式に対する批判意識、およびそうした人間様式に代替的な内奥から動かされている人間の在り方の提示という観点から読んでいくが、これがこの著作に外部から持ちこまれた視点ではなく、全体に通底しているジンメル自身のそれであることを示すため、ジンメル自身に語ってもらう必要がある。つまり、今述べた観点からの『ゲーテ』の再構成という性格をもつから、本稿では『ゲーテ』からの引用はやや多くならざるをえない。

3. 個人的生の根源としてのリズム

ジンメルがゲーテの存在、ゲーテの世界観の基礎に見出すのは、「(内奥から)動かされてあること(Bewegtheit)」、「有機的リズム」、「ダイナミズム」、「生動性(Lebendigkeit)」である。(『ゲーテ』では14箇所、人間の本質が「リズム」と表現されている。)つまりゲーテ、そしてジンメルにとっても、人間存在の根源は意志以前に運動に担われていること、いつも既にリズムに乗せられていることなのである。「詩人ゲーテ、このように生きた人ゲーテ、研究者ゲーテ、愛の人ゲーテ、文化創造者ゲーテ、これらのゲーテの背後とその中に……形式的なリズムとダイナミズムを感知せず、このリズムとダイナミズムは……「沈黙のうちに畏敬されるべき」存在の統一と関係していることを察しない者、そうした者にとってはゲーテは、ただゲーテだけが果たしうるものを果たすことはない。」(263-264)そして、人間はただ個人としてのみ存在し、一般的な法則に還元されることはないことを確信していたジンメルは、ゲーテが人間をライプニッツの言う「モナド(単子)」として把握していることに注意を向ける。ゲーテ、そしてまたジンメルにとって、人間は各人が自律した異なったモナドで、自身の内奥から固有のリズムで動かされながら、それぞれの仕方で世界全体を自身の内に映し出している。「活動性の純粋さを完全に象徴するゲーテの驚嘆すべき表現によれば、活動性の最終的な生の形式と基礎を形成している「モナド」の動かされてあることとは、「自転(Rotieren um sich selbst)」である。」(145)この各人の根源的運動性の独自性は、『ゲーテ』では他に例えば「本質定式」とも表現される。「不変の性格、志向、リズムを備えた生の過程は、共通の前提と形式賦与[原理]として、体験に対してと同様に創造に対しても働いている。……おそらく、概念には捉えられない—各個人それぞれに違う一本質定式が存在しており、それが個人の魂的事象を遍く、つまり体験における自我への世界の取り込みと同様に、創造における自我の世界への溶解をも規定している。」(28)

個人的生は、意志を超えた内奥から、個人独自のリズム、テンポで動かされているが、この運動は空虚な自転ではない。第一に、今示唆したように、それは常に世界全体を巻き込んだものである。「ゲーテは、一切の全ての彼の創造はいわば事物が彼の精神を通過すること、事物が彼の形式に入り込むことだと意識していた。……ゲーテにおいて世界の体験はいわばエネルギーを失うことなく創造へと転換したのであり、彼が非常に好んだ比喻によれば、ゲーテにとって体験と創造は吸う息と吐く息のように一体をなしていたのである。」(26)個人的生の根源的な運動性とは、いわば世界を呼吸する運動、後で説明する通り、世界を受容し直ちに創造する運動なのである。このようなゲーテ的存在の内に、

ジンメルは近代とは違う人間の在り方を見て取った。「ゲーテは内的にはいわば資本で食べていったことは決してなく、その精神的活動性は不断の現実への受容的な対向によって、そして現実が提供してくれる全てのもので身を養ったのである。」(101-102) 近代的な自我が「表象の体制」によって世界からは隔絶された存在であるのに対して、リズムに乗せられた自我は世界の絶えざる受容過程、その意味で各自のモナドを条件とした「機能」であり、世界と根源的に一体的なのである。ジンメルによれば、ゲーテの説く「自己自身と一致すること」つまり真の自己とは、「人間を統一し、人間をその存在の意味へと近づける人間的生の機能 (Lebensfunktion)」(50-51) に徹することであった。ゲーテの存在は「休まない内的な生成、常に揺れ動き、常に受容し常に産出する自我機能」(231) なのであった。

そして根源的な運動に乗せられて、純粋に機能となった個人的生は、近代におけるようにもっぱら世界を知性を通じてではなく、自然に与えられたままの感覚性全体で受容する。「ゲーテの認識の感覚的な、「眼を中心とする」性格とは、……世界の受容の場合にも人間の全体性が入り込まねばならないことを意味している。」(39) 感覚性全体、全身で世界と繋がり、世界と往還している在り方を、ジンメルは「芸術家性」、「芸術家的」存在と呼ぶ。「比較を絶するほど高い程度において、芸術家的根本形式がゲーテの生の事実に染み渡っている。……芸術家的自然本性の機能的な意味においては、ゲーテはおそらく我々の知るうちで最大の存在であるだろう。」(30) 芸術家的存在は世界に貫流されると同時に、世界に浸透している。「生の過程は自我の機能的全体性であり、いわば自分に対立するものを何ももたない、我々の全体であり絶対的なものである。」(73)

先取りして言うならば、このように動かされてある純粋な機能として常に現実の世界と一体であること、それゆえに感覚に与えられた現象、感覚的現象は、主観、認識であると同時にそのまま世界、客観的实在であり、それどころか価値、真理自身ですらあること、これはジンメルのゲーテ解釈の鍵の一つとなっている。人間の可能性を極限的に現実化しているゲーテ的存在のこの特質は、「主観の客観化」とも表現される。「ゲーテ的な生の意図の「理念」を定式化し、ゲーテの統一的一全体的な当為に一つの内容を規定するとすればこうなるだろう。すなわち、主観の客観化。」(230)¹²⁾

さらに、独自のリズムに担われていく個人的生は、世界（存在）全体の受容を通じて一つの連続的な生の過程を形成していくことが、ゲーテの世界観から読み取れるとジンメルは指摘する。ゲーテにとって個人的生は有機的に生成したのであり、こうした個人の発展の「動因」を指しているのが、ゲーテの「形態 (Gestalt)」概念であった。「ゲーテにとって事象の「法則」とは、切り離して考えられた部分に内在する属性、諸々の力そしてそれらの間の関係に当てはまる定式などではなかった。ゲーテにとっての法則は全体の形態であり、この形態は現実の力として……、諸部分を自身の実現へと駆り立てている。」(135) すなわち、「産出されるべき形態、典型によって規定された事物の形態学的現象が、全ての事象の中で働く力 (Potenz)」(135) であり、「「形態」は全ての要素の中に含まれている、駆動的で一切の生成を説明する動因」(137) なのである。個人的生の形態に関するジンメルの叙述は極めて簡素かつ抽象的で、とりわけ理解が困難であるが、おそらく、独自のリズムに担われる在り方に立ち還るとき、絶えざる世界受容（機能としての自我）の条件である、感覚性を含めた存在の全体（モナド、あるいは別の文脈で使われる言葉を用いれば精神、魂）自身が、(後述のように世界から取り入れた要素を統合しつつ) 形態として展開していくと、考えられているであろう。

ゲーテのこうした見方は決して目的論ではない、とジンメルは注意する。「これを目的論と見てはならない。……創造するあるいは……有機的に組織する力は、形態形成作用、形式限定作用を初めか

らその内に含んでおり、それどころかむしろ創造する力とは全くこの作用なのである。この力は、人間の目的に類比的で、それが単なる手段として仕えるような目的によって誘導される必要はない。」(135) 他方でゲーテの立場は、決定論(自然主義)からも厳格に区別されねばならない。なぜなら、後に再び取り上げるように、人間の実践には意志が介在するとゲーテは考えていたからである。もちろんゲーテの思うそれは無からの自発性などではなく、いわば内奥から動かされてあることによって「誘いだされた」¹³⁾意志であるが、それでもこの意志は動因としての形態を変異させうるのである。「根本法則」とその周囲の自由の遊動空間などは、厳密な科学とは無縁の考えである。自然法則は自然法則であり、そして一切の形態は、そもそも現実に存在しているならば、それがどれほど原型から外れた驚くべきものであっても法則に従って産出されたのであり、その地位は最もノーマルな現象に確かめられる地位と変わることはない。ただ法則が或る特定の、しかも原型的な形態へと向かうエネルギーにとっての定式であるところでのみ、その中心的な方向性が左右に逸らされて、逸脱してより弱く他の動因(モチーフ)と混同した現象の中で消え去ることがありうる。」(135-136) 個人の形態は普遍的形象としての「原型(Typus)」の実現ではあるが、「確かに完全に原型から解放されることはありえないものの、無数の変容、肥大化、委縮によって原型から離れていきうるのである」(137)。

ジンメルは、この「逸脱」に対してゲーテは両義的な姿勢を示したと言う。第一にゲーテにとって、それは単純に墮落でありえた。「ゲーテの場合、障害、弱さ、妨害がこの法則をその完全な実現に至らしめない可能性が、原理的にありうる。」(135) 実際、近代社会は、「自由意志」によるリズムの抑圧や人間の行動の纂奪によって特徴づけられたのだった。それゆえゲーテの生涯は自身の形態実現のための、「実存の調和」のための克己に貫かれていたことを、第6章「弁明と超克」を中心にジンメルはしばしば強調している。この「実存の調和」は、通常理解では、「実践的、宗教的、理論的、感情的な種類の或る理念を前提し、それに人格性の個々のエネルギーと内容を適合的かつ促進的に関係させて、その結果全体としての生が一つの理念的あるいは現実的な調子へと調整されることである。このことは自己支配と断念とを要求する。……しかし我々の存在の残りの部分のこうした断念と切除は、いわば有機的なものでは全然ない。なぜならそれは自身の再内奥の成長条件から現われているのではなく、この形態化は所与の個性とは全く調和しておらず、この個性にとっては何らかの仕方で外的な或る理念から行われているからである。……ゲーテの規範に従えば、人格性の調和は明らかに違う基調を帯びることになる。彼の形而上学的な楽観主義にとっては、この調和は個人の資質から規定されており、つまり調和はそれが完全に展開していることを指す名前である。」(189-190) こうしたゲーテの言葉を用いれば「エンテレケイア(完全現実態)」の実現にも、制限が要求されるのであり、それは通念的理解のような「自我の制限ではなく、自我への制限である」(190)。「自我は、到るところで要求、幻想、自分にはふさわしくないものに取り囲まれており、それらは我々が内からそれであるものと、いわばその周辺において融合している……。本来の自我は、そのままではこれら全てまで延び広がっているように見えるから、それはしばしばまず、その本来の範囲に自身を制限すること、全てを包括することを断念し、この断念を通じその自己に初めて到達することを学ばねばならない。……[こうした]自己制限はゲーテにおいてその最も純粋な意味に到達している。或る目的のためにではなく全体的な、エネルギーを担っている存在の統一性と完全性のために、そして結局それ自身のために、全てのエネルギー、全ての傾向は、いわばそれらのエゴイズム……によって誘惑される過剰を断念するのである。」(190-191)

しかし他方で、ゲーテは内奥から生きている個体には「逸脱」は認めなかったとも、ジンメルは指

摘する。「ゲーテは、植物に関して厳密な意味での奇形や委縮を語ることを禁じた。なぜなら「規則的なものも無規則なものも、一つの精神によって活かされているからである」。ここでは、相対的に規則的なものとそこからの逸脱を自身の要素として含む最高に「規則的なもの」が考えられており、またゲーテの自然概念は、それ固有の相対的な意味を包含している（「最も自然に反するものもまた自然である！」）」(36)。本稿の最後で再び取り上げるように、ゲーテは存在全体を、いわば自然の「鼓動」によって駆動されている、機械的因果性によって規定されてはおらず「原型」から離れていく、そして無目的な生成と見ていたのだった。「正常と異常とを、常に相互に揺れ動き、互いに影響を与え合うものとして観察しないならば、決して完全な直観に達することはできない。」(ゲーテ) ゲーテにとっては、正常なものや異常なものを包括する最高に正常なものが存在する。——「動物のメタモルフォーゼ」は、随意性と規則性、長所と欠陥とを包括する最高の法則性を教えてくれる。」(36) それゆえにゲーテは、存在は原理的に体系化不可能であると考えていた。「ゲーテは、ほとんど 50 年に渡る自然科学的研究の後でこう述べて、体系化傾向に反対している。「自然の体系：これは矛盾した表現である。自然は体系をもたない。自然は生をもち、生であり、見知らぬ中心から認識しえない境界へと到る系列である。」(89)

4. ゲーテの「プラグマティズム」

個人的生の根源である「動かされてあること」は、世界の絶えざる受容である。そして既に触れたように、形態を動因とする生の過程に織り込まれた受容は、そのままで創造なのである。「決定的なことは、芸術家は単に感覚で知覚するばかりではないこと、受動的な受容と体験の容器であるばかりではなく、その知覚は即座に、あるいはむしろ同時に創造的であること、これである。おそらく全ての直観行為のうちに存在している能動的に形成する要素は、芸術家の直観においては充溢し、活発に活動し、自由になっている……。芸術家の創造性は、一つの理念に従っての世界の諸要素の形成である。……しかしこの創造性は、芸術家の直観と体験の行為と、客観、現実性を確定し自らの中に引き入れる直観と体験の行為と不可分に展開される。」(63)

生の過程としての受容即創造とは、能動的な受容の働きとしての「直観」である。ただしこうした直観は、外部の価値への定位からは解放されているという意味では「無志向的な」受容である。そしてこうした直観において成立するのが、「感覚的現象」である。これから述べるように感覚的現象はそのままで真理でありうるから、「自己」の外部の価値や目的への繫縛を断って、自身独自の動因（法則）から動かされてあるとき、自我には世界が真の意味で「見え」うるのである。そして自我は機能である以上、既に示唆しておいたように直観においては「見る行為（見る者）」と「見えるもの」とが一体であり、それゆえ感覚的現象は（主観的）認識であると同時に客観的な实在それ自身である。主観的生の過程は同時に客観的な存在であるという逆説的な結びつきが、直観あるいは感覚的現象の中で生じている。ここでの直観とほぼ同義で用いられているゲーテの「理解（Begreifen）」概念を、ジンメルは次のように注釈している。「私はゲーテの意味における「理解」を、「原現象」と呼びたい。なぜなら、それはただ存在の同一性を基にしたのみ生じるので、そこでは事物の普遍的結合が最も含蓄深く表現され、機能的な関係が最も純粋な具象性を獲得し、[理解する自我と理解されるものとの]同一性にまで到っているからである。」(56) 別の角度から言えば、芸術家的な存在においては、感覚

性全体による直観を通じて自我と世界とはいわば真に「出会う」のだが、自我と世界とのこうした出会いの次元、自我に世界が「見える」次元の中でそのつど成立するものが感覚的現象であり、それゆえに生の過程は、感覚的現象の連続的成立過程とも見るのできるのである。

それではより詳しく言えば、直観の創造性、能動性とはどのような働きなのか。『ゲーテ』の錯雑した叙述の整理を試みれば、ジンメルはゲーテの言う直観に、形態としての生の実現に必要なものを媒介する働きと、芸術家的に総合的で統一する働きとを認めていたと思われる。

第一の働きから見ていくと、ジンメルは、ゲーテが随所で真理を「実り豊かなもの」、「促進するもの」と定義していることに着目する。ただし、ゲーテの立場をプラグマティズムのそれと混同してはならないことは、言うまでもない。ゲーテにとって重要だったのは、「表象の客観に向けられた面」でも「真理の理念的な内容」でもなく、「我々の意識の中の表象の存在が我々の生に対して有する意義」(34)、表象が「生自身の要素として、この生の全体性にとって促進的であるか有害であるか」(35)であった。(ジンメルは、プラグマティズムの考える内容としての表象と、ゲーテの考える生の過程の一環としての、生の過程に織り込まれたものとしての表象とを厳格に区別し、後者こそが真の表象であると見なしている。)
「現今の目的論的真理概念、特にプラグマティズムにとっては、その内容の[人間の世界支配にとっての]促進性が当該表象に真理価値を賦与するのであるが、ゲーテにとってはその表象の表象過程が促進的であることがそれを真理にするのであり、つまり問題は、その表象が魂の発展の連関において果たす生きた機能である。人間は、この表象を考えることによって促進されねばならない、それはこの人間の内的実存の統一的な全体意味に接続せねばならない……。そのとき、このダイナミックで個人的に有意義な表象の内容は真なのである。」(35)つまり表象の価値は、「生に即して測られる」(35)。「表象過程は生の全体性の中に、生を担い(tragend)かつ生に担われつつ(getragen)織り込まれている。ここに表象は最終審を見出す。」(35-36)内奥から動かされている個人的生の過程は、能動的直観を通じて世界からこのような意味で自身を促進するものを受容し、それを自身の要素として織り込む。自身を促進するものは世界からの受容を通じて初めて生の内容として成立するから、個人的生はその内容を「自身の運動性によって産出する(erzeugen)」(156)ともジンメルは表現する。「ゲーテは過程と[生の]内容との関係を有機的に考えており、そのため生は原理的に、価値ではあっても自身とは異質なものを内容として受け入れることはなく、……生がその純粹な意味を充足させているならば、この過程の遂行によって自身に適切な内容を自身から産み出すのである。この内容は生の客体と目的として生の外部に存するのではなく、生の創造性であり、発話された言葉が言葉の発話から切り離しえないように、生から切り離されえない。」(156)あるいは、精神はいわばミクロコスモスであり、このミクロコスモスに世界は「答える」、とも言われる。「世界は精神に対して、それ自身からは、精神が既にそれ自身から進んで出迎えている内容しか譲り渡さない。」(57)芸術家的直観は、生にとって実り豊かなものを迎え入れるいわばアプリアリとして機能するがゆえに、創造的なのである。

さてここで、ゲーテの形而上学的な根本的確信に関するジンメルの考えに触れておく。ゲーテのこの基礎的確信は、ジンメルのゲーテ解釈の要諦を理解するいわば第二の鍵であり、『ゲーテ』全篇を通じて多くの文脈で光が当てられているから、以下でもしばしば言及せざるをえないが、ここで或る程度まとめて述べておきたい。今、世界は個人的生にそれを促進するものを供給していくというゲーテの見解を見たが、両者の関係のこうした想定が示唆しているように、ゲーテの世界観の中核には「有機体的世界概念」(137)が存していたと、ジンメルは言う。「ゲーテにとって世界が有機体のような

のではなく、有機体が世界のようなのである。……有機体はゲーテにいわばマイクロコスモス、世界が統一として、いわばその形而上学的な中心から生きている形式の高度の類比に思われた。」(80) ここで考えられている「有機的世界統一のイメージは、有機体に関する経験的な表象を存在一般に転用した神話ではなく、この存在一般の感情あるいはイメージ」(80)であり、自身独自の動因から生きている自我と世界との有機的、調和的な連関への洞察を肝としている。「自己自身との一致において、あるいはこの一致の中で、全体としての人間と全体としての存在との関係がただちに浮かび上がっている。精神の正しい働きには、客観との調和的な関係が結びつけられている。……人間は、自らの内で自身を統一するとき、つまり「自己自身と一致する」とき初めて、それ自身において統一された世界の精神的対応像となっているということが、ゲーテの世界観全体の基礎に含まれている。……「いかなる個人もその性向によって、彼を個人として止揚することはない根本諸原則〔客観的ではあるがただその個人にのみ妥当する原則〕への権利をもつ。」そしてゲーテの思考様式の場合には、事物の客観的秩序からも正当化されるのではない根本諸原則を個人に認めることなどは全くありえない。正に「性向自身」が客観的事実なのであり、客観的事実はマイクロコスモス的に個人の全体に帰属している。[ここで性向とは、「存在の核の有機的傾向」、つまり法則としての形態を指す。]「自己自身」と一致した主観は、自己自身と一致した世界とのいわばその形式同等性によって、この世界の調和的に適切な対応像を自身の内に準備している。」(51) 個人的生の過程と世界（存在全体）とは根源的には有機的に連関しており、それゆえに世界は個人的生に必要なものを与えることを、ゲーテは深く確信していたのだった。「人間は、その諸器官をもって世界のうちに据えられており、そしてあるがままの器官はあるがままの世界と、促進、「正しい」態度の最大限を含みうるように通じている。」(42)

このように世界が全体として一絶えざる鼓動の中で一各個人的生によって各々独特に有機的に統一されていること、個人的生は其中で特別の地位を与えられつつもやはりそこに調和的に包摂されていること、これがゲーテの形而上学的根本確信であった。そしてこうした確信は、ゲーテにとって恣意的な思いつき、自身の世界観に整合性を与えるための便宜的主張ではなく、反対にそれこそがゲーテの他の命題にとっての究極的な源泉であったことを、ジンメルは強調する。それはいわば、ゲーテの宗教的な根本経験だったのである。おおよそあらゆる宗教は二元論的であり、苦悩に塗れた汚れた現世とメシアの統べる彼岸、救いを求める人間と救う神、罪あるものと救われる者といった絶対的な区別を内包している。だが「ゲーテにおける最も深い宗教性、そして彼の宗教性一般の性格」は、「絶対的なものが一つの価値であり、価値が区別とは結びつけられていない」(176) ことに存するとジンメルは説く。「ゲーテの宗教的な「自然」概念においては、永遠に全てを統べる法則的なもの、存在の絶対的なものが、既にそれ自身において畏敬すべきもの、端的に妥当するもの、完全なもの、美しいものである。このような自然概念は、明らかにその形式的な原理上、教会を建立することのできる一切の宗教からは締め出される。……一切のそうした宗教の二元論は、ゲーテの宗教性からは切り離されており、両者の宥和は不可能である。ゲーテの宗教性においては、芸術家的な生の気分が、そこに含意されている宗教的な意義を最も明瞭に展開しているのである。ゲーテの世界観は、存在の総体の統一を直接にまたそれ自身において価値に充ちたものとして把握する巨人的試みとして把握することができる。ゲーテが神を自然が達する限界にまで及ばせ、自然を神が達する限界にまで及ばせたため、両者は相互に浸透し合い、相互に入り込んで抱懷し合っているとすれば、ゲーテにとって神は存在の価値契機の名前であり、この価値契機は存在の現実性契機、つまり自然と一体となって生きているのである。」(177)

5. 「超価値」としての世界

直観の第一の能動的側面、個人的生の過程を促進する働きの考察に戻ろう。根源的な動かされてあることに立ち還り、それに乗った個人の直観にとって、感覚的現象は、自身の法則（形態）にとっての「必要性」や「不可欠なもの」の領域、つまり価値の領域であるだろう。もちろん、外部にある主観から独立に存在する価値を、主観が自身の内部に引き入れるのではない。自我は機能であり、後述の通り世界は真理として現れるためには自我の働きを必要とするように、形態を動因とする個人的生も、自身を促進し統一的全体を実現また維持するために世界に必要とする。言い換えれば、自我は直接世界の中を生きており、そして形態を動因とする個人的生は世界と有機的に連関している以上、自身の「有機的なリズム」に担われた個人の直観には、世界は必要不可欠なもの、その意味で真理の領域として見えるのである。主観でもあり客観でもある感覚的現象は、形態というアプリオリを通じて、そのまま価値、自身を促進するものとしての真理となる。「真理とはいわば人間の生と、この生がそこへと組み入れられている世界の総体性との関係である。それが真理であるのは……思考が、我々の生理的性質あるいは我々の感情と同様に人間の存在だからである。……このように理解された真理を担い、規定しているのは、*全体的な人間*、例えば切り離された「悟性」能力ではなく、人間の総体性である。人間の総体性が、正に存在の総体性に織り込まれているのである。」(38)

今見てきたことを、ジンメルは個人的生の連続過程としての側面に光を当てて、次のようにも表現している。「我々の認識表象は、我々の個性の過程によって一貫して導かれながら、存在の全体から出来している—認識表象の内容はこの存在全体に関わるものである—がゆえに、真理を自身のうちに担っている。」(55) こうしてゲーテは、「原因と目的、単なる現実性と意志された価値〔の対立〕を超えた、生それ自身が経過していく層を指し示した」(43)、とジンメルは指摘する。自身の内奥から動かされてある個人的生は、日常的、相対的な真偽、善悪、美醜を超えた、絶対的な真理、絶対的な価値次元の中で展開されていくのであり、そうした次元をジンメルは「*超価値 (Über-Wert)*」と名づけたのだった。「ゲーテは自身の存在の理念と現実性を超価値、として受け取っていた。つまり、或る絶対的な意味において価値に満ち、有意義で、正しいものとして。このような超価値としてゲーテの生は、善と悪、高潔さと低劣さ、成功と失敗の対立関係を超えている。……我々が生を機能的で絶対的なものとして感じれば感じるほど、生には一つの意義が、一つの「価値」が備わることになるのである。」(72-73) ゲーテは、内奥からの生ならばいわば絶対的に肯定したのであり、ジンメルが引用しているゲーテの教育に関する次の言葉は、このような文脈の中に据えることもできるだろう。「詩人は生まれつきの才能だと認められている。一切の芸術に関して生まれつきの才能が、認めねばならないがゆえに認められている。しかし正確に考察するならば、いかなる能力、最も些細な能力でさえも生まれつきの才能である。そしていかなる才能も特定の何ごとかへの才能であり、何ごとにも向けさせうる無規定の才能などはない。ただ我々のはっきりしない中核を欠いた教育だけが、人間を不確かにするのである。教育は衝動を活性化させる代わりに、*願望を植*えつけている。生まれもった素質を育ててではなく、その性質とは非常にしばしば合致することのない対象を欲求し、それらを得るよう努力することを強いているのである。」(154-155)

さらにジンメルは、個人的生の内部にも視点を置き移していく。すなわちジンメルは、老齡期のゲーテが実践を重視し、そして「我々の最終的な実践的価値」(143)として挙げられている「日々の要求」(「汝の義務は何か／日々の要求である」)を、次のように解釈するのである。「多くの発言が示してい

るように、ゲーテにとって活動は多くの生の内容あるいは実証の一つ、というのではなく、活動は生自身であり、人間的存在の特殊なエネルギーである。そして生はただそれ自身に委ねられさえすればよいということ、すなわち活動はいかなる瞬間にも、当座必要とするものの全てが含まれているような最も間近な目的をもち、また次の瞬間には再びその瞬間の必然性が現れるということ、こうしたことは人間の存在の自然的な調和に関するゲーテの確信に基礎づけられている。生と、瞬間ごとに移行していく生の合目的性とに対する深い信頼、言い換えれば、その鼓動がそのつど最も間近な目的を予示するような、あるいはその鼓動に一般的な存在の連関が最も間近な目的を与えるような、そうした活動への信頼、私にはこれこそが、「日々の要求」が我々の義務であるという発言の本来的な意味であるように思われる。」(143)

しかしこのことは、生は自分自身に委ねられれば、自ずから、あるいは因果的に規定されて展開されていくことを意味してはいない。必要なもの、不可欠なものの領域が直観に「見える」とき、個人的生の意志が「誘いだされ」てくるのであり、本来的な生の過程は、独自のリズムとそれに乗せられている自我の意志とから縊り合されているのである。「こうした必要性を生は自己自身から産み出し、それを自己自身[の意志]から満たしている。これらの必要性が指定されたのは、その価値ゆえ、その望ましさゆえではない。それらは単に「不可欠なもの」なのである。」(43) 個人的生の過程に組み入れられた直観(感覚的現象)は、不可欠なものを意志へと媒介していく。ジンメルが繰り返し強調するように、ゲーテの存在は目的論も因果論も越えているのである。「必要なものは精神的・生命的な性質のものであるから、機械的に産出される事実性のような単純な因果性ではない。一切の目的論的なものはそれ自身として或る価値に、或る善を目的として意識的に指定することに依存しているとすれば、ゲーテがここで示唆している「不可欠なもの」の範疇は、それ自身においても意識された場合でも、因果性か目的論かという二者択一を超えている。不可欠なものとは、生がその存立のために要求するものであるが、生はそれを自ずからではなく、ただ我々の意志を通じて実現することしかできない(だから必要ではあれ満たし損なうことはありうる)。」(43) 次の文章には、外部の何かに隷属して生きるのではなく、自身のリズムに担われて変容しながら生きるというゲーテの実存(本来の実存)に関するジンメルのイメージが、鮮明に現われているだろう。「諸目的が遥か遠くから各瞬間の当為を規定することは、必要ではない。そうではなく生は一步一步発展していくのであり、その判断基準を見当もつかない遠くの目的から期待するのではない。(これが、キリスト教に反対するゲーテの決定的な理由の一つである。)それゆえ生と同義である活動は、純粹に感受するならば、その要求された内容を直接に己の前に有しているのであり、次の一步に関する知識(客観的には日々の要求)は、いわば活動の生得の形式なのである。このことは、力としての、過程としての生が、他の秩序からそれに指定される一切の内容に対して勝利することに他ならない。……生が最も簡単なものを、最も間近にあるものを、その瞬間には正しい実践を、日々の要求を、特定の内容を詳しく挙げることなく我々に指示するとしたら、このことは単に、実践的価値は生の泉が流れていく方向にあるのであり、実践的価値は何らか他の方向から歩み寄られるのではないということ、このことの象徴に過ぎない。つまり、生の経過そのものの力と価値とに対する象徴に過ぎない。生の経過は、我々が活動性と名づける全てのものに対して、その内容を、それ固有の形式において、すなわち持続的な、飛躍のない瞬間ごとの産出において、注入するのである。活動性そのものが既に本来的な価値であつたがゆえに、ゲーテは実践をいわば最小限の内容に制限したこと、このことは、彼にとって活動性は人間が生きる仕方であり、そして生自身が生の決定的な価値であることの、結果なのである。」(143-144)

注

- 1) 拙論を参照のこと。荻野雄「曖昧な自我の哲学 ―山崎正和と同時代の日本―」『京都教育大学紀要』, 2014, 147-163 頁。
- 2) 山崎正和『リズムの哲学ノート』中央公論新社, 2018, 232 頁。
- 3) Rudolph H. Weingartner, *Experience and Culture The Philosophie of Georg Simmel*, Wesleyan University Press, 1960. François Leger, *La Pensée de Georg Simmel Contribution à l'histoire des idées un Allemagne au débuts du XX^e siècle*, Kimé, 1989.
- 4) 北川東子『ジンメル：生の形式』講談社, 1997, 212-222 頁。西谷敬「ジンメルの「個性的法則」」『龍谷大学論集』463, 2004, pp.21-41。
- 5) Michael Großheim, *Von Georg Simmel zu Martin Heidegger Philosophie zwischen Leben und Existenz*, Bouvier Verlag, 1991, S.37-40. ただしグロスハイムも、やはりジンメルの哲学をもっぱら「生」と「形式」の葛藤という観点で捉えている。
- 6) Jürgen Habermas, “Georg Simmel über Philosophie und Kultur”, in, *Texte und Kontexte*, Suhrkamp, 1991, S.161.
- 7) このジンメル・ハンドブックに「日本におけるジンメル受容」について執筆する機会をいただき、ジンメルと山崎の社交理論の相違について考えていくうち、山崎の「リズムの哲学」とジンメルの生の哲学の深い親近性に気がついたことが、本論文作成の機縁となった。
- 8) 以下、括弧付きの数字を付けられている引用文は『ゲーテ』からのもので、括弧内の数字は頁数を指す。Georg Simmel, *Goethe*, in, *Gesamtausgabe 15*, Suhrkamp, 2003, S.7-270. なお、引用文中の斜字体は原文のイタリックに対応している。
- 9) Simmel, *Einleitung in die Moralphilosophie : eine Kritik der ethischen Grundbegriffe Band II Gesamtausgabe 4*, Suhrkamp, 1991, S.195-199.
- 10) José Ortega y Gasset (übersetzt von Helene Weyl), Um einen Goethe von innen bittend, in, *Gesammelte Werke Band III*, 1978, S. 271.
- 11) Leger, *La Pensée de Georg Simmel*, pp.230-236. ゲーテ研究の領域では、土橋實の研究が、ジンメルの解釈の統一像を提示することはないながらも、『ゲーテ』の記述を随所で参照している。土橋實『ゲーテ世界観の研究 ―その方法と理論―』ミネルヴァ書房, 1999。
- 12) 遺稿に残されていた文章が示すように、こうした解釈の視角や定式化にはジンメル自身の思想が色濃く投影されていた。「表象世界と物自体とが相互に対立することは、ただ表象作用―絶対的な意味で捉えられた―が両者を包括しているから可能となっている。しかしおそらくは正に同じことを物自体に関しても言いうるだろう。」(Simmel, “Aus dem nachgelassenen Tagebuch”, in, *Gesamtausgabe 20*, 2004, S.261.) 「私の問題、それは主観の客観化である……。」(Ebd., S.262.)
- 13) 山崎『リズムの哲学ノート』, 245 頁。

参考文献

ゲーテ (高橋義人編訳, 前田富士男訳)『自然と象徴 ―自然科学論集』富山房百科文庫, 1982。

坂井栄八郎『ゲーテとその時代』朝日新聞社，1996。

高橋義人『形態と象徴 ゲーテと「緑の自然科学」』岩波書店，1988。